

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：32692

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26590100

研究課題名(和文)外国人児童と日本人保育士の相互行為における身体性と言語的行為に関する社会学的研究

研究課題名(英文)The sociological studies of verbal and non-verbal activities in interaction between non-Japanese children and Japanese caregiver

研究代表者

山崎 晶子(YAMAZAKI, Akiko)

東京工科大学・メディア学部・准教授

研究者番号：00325896

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、保育園における外国人の園児と日本人の保育者がいかに接するかを分析を行った。中心的に分析した例は次の二つである。1) 来日したての園児が日本語がわからない時に三輪車の順番をとる場合と、2) 日本語を話せるようになった時に他の日本人園児と関わる場面であった。第一の例では、保育者が争いに対して介入し、第二の例では子供同士が仲裁をした。子供同士が仲裁を行う時は保育者が用いる「これも同じだよ」という規範の共有の言葉を使用していた。また、第一の例のように、言葉が分からない場合には、簡単な言葉「順番」を発して、子供を混乱させないようにしていたことがわかった。さらにインタビューやアンケートも行った。

研究成果の概要(英文)：In this study, we have been observing and filming a cross cultural nursery school which has been located in the Saitama prefecture. In this nursery school, almost 30 pre-school children are enrolled. The ratio of Japanese children to non-Japanese children is varying every year. Teachers know about and prepare for the cultural background of each child, especially those from other countries. However, teachers basically speak Japanese to every child. Despite this, the teachers do speak a few words of the child's native language, when they have very important instructions to give to newly enrolled international child. We find out that children frequently dispute and confront in the nursery school. Teacher reach out solution by two means. For children who can not speak Japanese, teacher mediate by one word, as like 'turn'. For , children who can speak Japanese, teacher share the norms.

研究分野：社会学

キーワード：相互行為 日本人保育者 外国人園児 多文化 社会学 会話分析 相互行為分析 エスノメソドロジ

## 1. 研究開始当初の背景

(1)本研究を構想した2012年から2013年にかけては、アメリカ(ロサンゼルス、ハワイ)、カナダ(バンクーバー、トロント)という日系人が多く居住した地域と、周防大島と和歌山県美浜町という多くの住民がアメリカやカナダに移住した地域で移民体験者への聞き取り等の調査を行っていた。さらに、日系ブラジル人が住んでいる日本国内の地区(群馬県大泉町等)での研究を試みていた。日系人の抱える課題の一つは、当事者の文化的背景が異なることであった。さらに、国や人種によるカテゴリー化(区別)が行われ、就職などを始め不利益を被ることがもう一つの課題であった。

現代の日本の社会では、外国籍の人々は第二次世界大戦の前のアメリカやカナダで日系人が排斥されたような大きな社会的紛争には直面していない。しかし、外国籍の人々は1980年代以降増加を続けている。保育園にも、様々な国の名前を持つ様々な外国籍あるいは日本で子ども時代を過ごしたのではない日本人の保護者を持つ子どもたちが入園するようになった。現場には様々な問題が挙げられている。子どもたちの着替えに関して厚着や薄着をしすぎる、またお弁当に関してもキャラ弁(キャラクターを模したお弁当)が流行しているにも関わらず、ビニール袋に入ったお弁当を持って来る等様々な日本的な育児との違いがあることが、保護者との言葉の違いを含めて保育の現場の中でも解決を必要とする課題の一つであるとともに、社会的課題となっていた。

(2)学術の上でも、子供と保育者(観察した保育園では保育士以外も保育を行うので以降保育者とする)がどのように相互行為を行うかということは、大きな関心を寄せられている。

外国人の子ども日本人の父親や母親を持っている場合でも他の文化的背景を持っている場合)と日本人保育者が実際にどのように関わっているかを明らかにすることは、社会学的な学術課題としても社会の課題としてもともに重要であった。これらの理由から、本課題に取り組むこととした。

## 2. 研究の目的

日本人保育士と外国人の子どもがいかにして相互行為を行うかということを観察してそれらを相互行為分析によって分析し、外国人の子どもの困り感に対して日本人保育者がいかにして関わるか、子供同士はどのような相互行為をするかを明らかにして、社会的課題及び学術的課題の解決に寄与することを目的とした。

このことを明らかにすることによって、日系人研究や多文化共生研究において重要である「文化的背景」が異なる人々、この場合は生まれながらの「文化」を持つ人がメイン

ストリームの「文化」(この場合は、日本の子育て文化や日本人の子どもの文化)に対して適応して同化するのか、また保護者が持つ生まれながらの国の「文化」をメインストリームの文化の中でいかにして持ち続けるようにするのかを観察し、特に保育者たちがいかにして子どもたちの生まれながら(出身地)の「文化」を保育の中で扱うかを分析しようとした。

研究開始当初の背景(2)で述べたように、子ども同士、保育者と子どもの相互行為は大きな関心を寄せられてきた。エスノメソドロジーと会話分析の中でもその解明に多大な努力がなされてきた。例えば、マージョリー・ハーネス・グッドウィン(Goodwin,1990)は、こどもが命令形のことばを用いる場面を分析して、男の子同士では階層性を示すことを明らかにした。また、女の子同士の「あの子が言ってたんだけど」という口論のなかで、その場にいない女の子が言ったこととその悪口を告げ口することで大々的な喧嘩になることを明らかにした。

また、マルディ・キッドウェル(Kidwell,2013)は、保育者は子どもが悪いことをした時、「悪いことをした」ということを子どもに知らせるために、最初は子どもの視線を得るために、言葉(声かけ)によって顔をむけるようにして、次は同じ内容を話しながら身体に触り、さらに顔を触りながら、その言葉を繰り返すことを、保育園での保育者と子供の相互行為の分析から示した(キッドウェルが分析した断片では子どもは視線を向けなかった)。この研究は、グッドウィンやキッドウェルの抱いた子どもの相互行為に対する関心を、日本において検証することも一つの目的とした。

## 3. 研究の方法

(1)本研究は、保育園での保育者と子ども、子ども同士のビデオ撮影と、保育園長と保育者へのインタビュー及びアンケート、また送り迎えする保護者を長期にわたって観察した。

研究開始当初から、埼玉県さいたま市の「そよかぜ保育室」で長期にわたるビデオ撮影を行った。そよかぜ保育室は地域の子どもたちを受け入れるだけではなく、埼玉大学に留学している大学院生や大学生、あるいは勤務している国内外の研究者の子どもたちを多く受け入れている。そのために、そよかぜ保育室は、外国人の子どもたちの受け入れとその保護者への支援をおこなうことを目標としている。

そよかぜ保育室の後援会と保育者には研究の目的を説明してそのためにビデオ撮影を行いたいという依頼をして承諾を得た。同様に保護者にも説明を行い、学期ごとに撮影をする二週間前に依頼をして承諾書を得た。

そして、園長と保育の進行に気をつけて子どもたちの様子に関して打ち合わせを行っ

た。撮影日は承諾を得た時に保護者に周知して、保育者にピンマイクをつけて埼玉大学と東京工科大学の学生が撮影を行った。

(2)学術的な研究の方法は、エスノメソドロジーと会話分析に基づいて行った。相互行為分析(マルチモダール分析、マルチモダールインタラクション分析)と呼ばれ、言語的行為と身体的行為が相互行為にいかにして継起的に用いられるかを分析するものである。

グッドウィンやキッドウェルの研究のような先行研究があるためだけでなく、子どもたちは、言語的な発達の上であり、身体を用いて相互行為を行うことが研究方法として相互行為分析を用いる要因となった。

相互行為分析を行うために、分析を行うデータの文字化(トランスクリプト)を行った。

また、保育者へのインタビュー、保護者の観察を行った。

#### 4. 研究成果

この研究では、マシュー・バーデルスキーや五十嵐素子が多く業績を出しているが、外国人の幼児に対する日本人保育者の対応に関するデータと子ども同士に関するデータの分析結果をこちらに示したい。

##### (1) 外国人幼児と日本人保育者の場合

ここで分析するのは、来日して3ヶ月の幼児である。保育者は、幼児の母語である韓国語が分からないため、幼児の行動それぞれに対応すると同時に、規範(順番抜きをしなさい)ということ伝える。

ここで、青い服を着た韓国から来日して3ヶ月後の子ども(ここではJと呼ぶ)は三輪車に乗る順番を待っていた。そしてJの順番と思った時に他の園児が三輪車に乗ってしまった。Jは、「僕の番だよ」と韓国語で言いながら三輪車に乗っている園児を引きずり下ろそうとしている(図1)。Jはそれから「僕の」「違う」「僕乗ってないよ」と韓国語で自分の行為の正当性を主張しながら身をよじって泣き叫ぶ(図2)が、保育者は「三輪車に乗った園児」を引き釣り下ろそうとしていることを止める。



図1 Jは「僕の番だよ」と言いながら三輪車に乗ろうとする。



図2 身をよじって泣き叫ぶJ「泣き叫ぶ」に対して、保育者は「順番」と言いなだめる。

この二つの図に示した幼児のトラブル(他の子どもに掴みかかる、順番を無視された、訴えかけても分からない)などに対して、保育者は「順番」と言い、今三輪車に乗っている子どもに「代わってあげて」と言う。

日本人保育者が外国人の子どもに対して対応するヒントを得た。一つは、「順番」等の簡単な言葉(発話)を一つだけ発し、状況と動作(すぐに三輪車に乗ろうとすることを制止する)と発話のマッチングをすることである。また、子どもの集団に上手く入れない場合は、様々な仲裁をすることがわかった。

##### (2) 子ども同士の場合

食べるための工夫も外国人児童のためにしている。「そよかぜ保育室」は多くのイスラム教徒の子どもやヒンズー教の子どもたち、またベジタリアンの子どもたちがいるため、豚肉や牛肉を除くだけではなく野菜と魚だけを用いた給食を提供していた。しかし、一般的に用いるカレーペーストには、豚由来のものが使用されているため、多くの子どもの大好物であるカレーが提供される時には、イスラムカレー(食器や台所を共有し、食材がハラールではないためハラールフードではない)を供する。イスラムカレーは、日本のカレーペーストを使わず調理をするため、ペーストを使ったカレーの色よりもややオレンジ色がかっている。

(1)の事例で泣いて三輪車の順番交代を促していた韓国人の5歳の子どもは、来日9ヶ月後の(2)(本事例)では流暢に日本語を話している。この給食場面では、パキスタンの5歳児(H)と3歳児のインドネシア人(I)はイスラムカレーを、韓国人の園児(J)と日本人の5歳児(S)はカレーペーストを使ったカレーを食べている。

ここでは4人の会話の簡単なトランスクリプトを紙幅の制限のため沈黙の時間をカットして示す。

(J: 5才、韓国、S: 5才、日本、H: 5才、パキスタン、I: 3才、インドネシア)

1. J: ぼくはカレーらいむ::
2. (0.8)
3. J: おまえはミカン:
4. (1.2)

5. S: ミカンじゃ[ない]:  
 6. H: [カレ:ライス].  
 7. (1.0)  
 8. J: これがカレ:ライスだよ.  
 9. (0.8)  
 10. J: これはね(0.2)キュウイだよ.:  
 11. (2.0)  
 12. I: これもカレ:..  
 13. (1.2)  
 14. H: これカレ:ライス.  
 15. (0.8)  
 16. J: (ちがう)ここにあるのはね:° ミカンだよ.  
 17. (0.5)  
 18. H: これカレ:ライス.  
 19. (0.5)  
 20. J: ° ミカン(だよ)°  
 21. (0.3)  
 22. J: これこ:( )カレ:ライスだよ.  
 23. (2.0)  
 24. J: これがカレ:ライスだよ.  
 25. (1.6)  
 26. S: これは(0.4)これカレ:ライスだよね.  
 27. (1.8)  
 28. S: (カレ:)だよね.  
 29. (2.0)  
 30. S: (カレ:)だよね.

ここでは、Jは、自分のカレーは「カレー」でありイスラムカレーをさして「みかん」だよと言う。Jは、同じように日本式のカレーを食べるSに同意を求める。そして、「みかん」と言われたHは「これカレーライス」と言い、同じくイスラムカレーを食べるIも「これカレーライス」と言う。

この短い断片のなかで、Jはカレーを「カレー」と「みかん」に分類(カテゴリー化)し、そのカテゴリー化とそのカテゴリー化が含む否定的なニュアンス(カレーではないこと)に関して、HとIは争っている。

このなかで、マージョリー・ハーネス・グッドウィン(Goodwin, 1990)が、「結びつけるフォーマット」と述べたように口論の中で、同じ言葉「カレー」「これ」が繰り返される。争う当事者は、前の挑発した者と同じ言葉を繰り返すが、指さしや言葉の調子を伴い、同じ言葉が肯定(「これがカレーライスだよね」26行目)と否定(前の「これがカレーライスだよ。」(8行目)に対してこれカレーライス(14行目))になる。

また、カレーであることは集団にとって「肯定的」、みかんであることは「否定的」なニュアンスを包含することが、二組の肯定的及び否定的な(二分的)なカテゴリー化を争わせるもととなる。

この口論は、日本式のカレーを食べていたSが「これもカレーだよね」とHに言い、Hがうなづくことを繰り返すことによって、終了する。子どもが口論を広げた「これカレーライスだよ」と言葉の「結びつけるフォー

ット」を用いて子供が仲裁をしている。そして、「ね」という終助詞を使ってHをその仲裁に同意させる。

(1)の事例は、子どもが保育園や日本語を分からない場合に、保育者が関わる。保育者はなるべく意味を複雑にせず、「順番」という言葉を発するのみである。子どもの争いに対する仲裁は、保育者が行った。(2)の事例は子ども同士で仲裁をした。また、この事例での子どもが行った仲裁は、保育者が保育園でイスラムカレーを食べる時に、全員の子どもたちに「これもカレーライスだよ」と同じカレーを食べていることを共有するための言葉によるものであった。

発話の単純化、振る舞いの明確化とイスラムカレーのような全員で食べるための工夫や「一緒にいること」を示し、子ども同士が問題を解決する場合には保育者は踏み込んで仲裁しないことなどが知見として得ることが出来た。

またこれ以外にも保育者へのインタビューやアンケート、また保護者との話し合いを通じて、これらの問題の所在と解決を理解することが出来た。

本研究から得た知見は、2017年度に論文として海外の雑誌に投稿する。

#### 引用文献

Marjorie Harness Goodwin. He-Said-She-Said: Talk as Social Organization among Black Children. Bloomington: Indiana University Press.1990

Mardi Kidwell. Framing, grounding and coordinating conversational interaction: Posture, gaze, facial expression, and movement in space. In A. Cienki, E. Fricke, D. McNeill, & C. Müller (Eds.), *Body - Language - Communication; Linguistics and Communication Sciences: An International Handbook on Multimodality in Human Interaction* (pp. 100-112). Amsterdam: Berlin: Mouton de Gruyter.2013

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

Noriko Takei, Matthew Burdelski, Shifting of “expert” and “novice” roles between roles between/within two languages: Socialization, identity and epistemics in family dinnertime conversations, *Multiligua:Journal of Corss-Cultural and Interlanguage Communication*, 印刷中,2017, <https://doi.org/10.1515/multi-2016-0014>,査読あり

Matthew Burdelski, Reported speech

as cultural gloss and directive: Socializing norms of speaking and acting in Japanese caregiver-child triadic interaction”,*Text &Talk*, 35(5),2015,575-595,DOI:10.1515/53x5-2015-0017.査読あり

〔学会発表〕(計 7件)

五十嵐素子、教授場面における会話の進め方の特徴 授業の相互行為分析の知見から、日本教育方法学会第52回大会、2016年10月2日、九州大学箱崎キャンパス、福岡市、福岡県

Matthew Burdelski, Interactional routines, xplicit instruction, and affective stance in child-child interactions in Japanese, 14<sup>th</sup> Pragmatics conference, 2015年7月28日、Antwerp, Belgium

Matthew Burdelski, Interaction routines and explicit interaction in child-child interactions in a Japanese preschool, American association for applied linguistics,2015年03月21日~2015年3月24日、Toronto, Canada

Matthew Burdelski, Verbal and embodied insturctio an response in caring for a pet, National institute of informatics Shonan meeting seminar,2015年03月19日~2015年03月21日、湘南国際村センター、葉山町、神奈川県

五十嵐素子、「教示作業の組織化のデザインー学習者による利用可能性の視点からー」、第87回日本社会学会大会、2014年11月23日、神戸大学、神戸市、兵庫県

五十嵐素子、「授業における学習の達成 教示で示された行為の基準とその利用の視点からー」、日本教育社会学会台66回大会、2014年09月14日、松山大学、松山市、愛媛県

Akiko Yamazaki, Hyun Jung Kwon,Keiko Ikeda, Children’s mediation of dipute,4<sup>th</sup> international conference of conversation analysis.2014年06月23日~06月29日、ロサンジェルス、アメリカ

〔図書〕(計 6件)

Matthew,Burdelski 他、Springer, Young children’s initial assessments in Japanese,2017印刷中

Matthew,Burdelski,Springer, Japanese language socialization,2017,印刷中

五十嵐素子他、ナカニシヤ出版、素朴心理学から Doing Sociology へー記述の下での理解と動機のレリヴァンス、2016、326

五十嵐素子、ナカニシヤ出版、『教示』

と結びついた『学習の達成』 行為の基準の視点から 2016,326.

Matthew Burdelski 他、de Gruyter Mouton, Teaching and learning (im)politeness,2015,364

高田明、高梨克也、遠藤智子、黒嶋智美、マシュー・バーデルスキー、嶋田陽子、森田笑、川島理恵、高木智世、昭和堂、子育ての会話分析、2016,251

6. 研究組織

(1)研究代表者

山崎 晶子 (YAMAZAKI,Akiko )  
東京工科大学・メディア学部・准教授  
研究者番号：00325896

(2)研究分担者

山崎 敬一 (YAMAZAKI,Keiichi)  
埼玉大学・人文社会科学部・教授  
研究者番号：80191261

マシュー・バーデルスキー

(BURDELSKI,Matthew)  
大阪大学・文学研究科・教授  
研究者番号：80625020

五十嵐 素子(IGARASHI,Motoko)

北海学園大学・法学部・准教授  
研究者番号：70413292

(4)研究協力者

橋本 慶子(HASHIMOTO,Keiko)  
そよかぜ保育園・園長